

## A. カミュの『反抗的人間』L'Homme Revolte再評価

著者	平田 重和
雑誌名	仏語仏文学
巻	32
ページ	1-18
発行年	2006-02-28
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/12665">http://hdl.handle.net/10112/12665</a>

## A.カミュの『反抗的人間』 *L'Homme Révolté* 再評価

平 田 重 和

1991年にソ連邦が崩壊し、いわゆる東西冷戦構造が崩れ、社会主義国家のすべてがそうだとは言えないにしても、共産主義国家内の、旧ナチス国家にも似た政治的抑圧体制が次々と明るみに出て、社会主義思想とは何であったのか、深く考えさせられるところである。本来、虐げられた人々を救済するはずであった社会主義が、権力の座についた指導者が、自分たちの幸福と利益のみを追求する独裁国家体制とし、そうした特権階級のみが當と幸せを享受する帝国主義と何ら変わる事のない国家に変貌している現実を見る時、「歴史」というものの危さが感じられる。

21世紀になった今、カミュの『反抗的人間』の先見性がにわかに浮上してきているようだし、この作品の「再評価」を試みる誘惑にかられる。カミュが1956年にハンガリーで起こった民主化運動に対するソ連軍による武力弾圧に対していち早く抗議したことなど、国家的テロや暴力、不正に対して人間的立場に基づいて抗議することをやめなかったことを思い出してみると、序説を除くと全体で五章からなる『反抗的人間』をいわゆる「カミュ＝サルトル論争」を含めて、今一度検討してみることは無駄ではないと思う。

カミュにおける「反抗」の思想は、かなり早い時期にまで遡ることができる。『シジフォスの神話』は「不条理」の思想ということで一世を風靡した観があるが、『シジフォスの神話』の結論部を見ると、すでに「反抗」の思想が明瞭に読み取れるだろう。「このようにして私は不条理から、私の反抗、私の自由、私の情熱という三つの帰結を引き出す。意識の働きだけに

よって、死への誘いであったものを私は生の規則に変える——そうして私は自殺を拒否するのだ」<sup>1)</sup>というくだりがあることは周知のところである。

カミュの反抗の思想が底流として、彼の生涯にわたって保持されていたことを認めたとしても、初期の反抗は、まだ個人的な領域を出るものでないことは認めざるを得ない。個人的な死、具体的には、彼個人の差し迫った死に対する思索、人間の条件である避けられぬ死に対する葛藤・もがき・反逆、これが彼の初期の反抗の思想を特徴づけているものである。

『シジフォスの神話』に代表されるいわゆる不条理期におけるカミュの根本思想と言えば、「不条理」といって間違いではない。しかし、『反抗的人間』におけるカミュの根本思想を見ようとする時、『シジフォスの神話』において既に、表明されていた「反抗」の思想はにわかにはその重大性がクローズアップされてくる。

サルトルが徴兵され戦争体験をしたことで、個人的な倫理問題から急速に他者の観念へと問題の関心を移行させたのと、似たような事情がカミュにも起こったのだろう。恐らくレジスタンスの抵抗運動を契機としてカミュの「反抗」の思想は、個人から万人への「反抗」の思想へと拡大されて行ったことが跡付けられる。我々は元アメリカのルイジアナ州立大学教授 F.H.ウィルホイト Jr がその著『ニヒリズムを超えて』*Beyond Nihilism Albert Camus's Contribution to Political Thought*において次のように述べているのを評価する。

生の最後の空しさがどうであれ、同時に彼（＝カミュ）は、死と不条理に対する反抗の必要性を強調する。不条理の諸著述につづく作品のなかで、彼は、人間であることとは、自己自身だけでなく、すべての人間の生に脅威を与える諸力に対する抵抗を包摂するように、反抗を拡大してゆく必要があることを、ますます明晰に認識した。<sup>2)</sup>

カミュ自身も、「殺人と反抗を前にして、自殺と不条理の概念をめぐってはじめて考察を続けることが本書の目的である」と初期の思想と反抗の連

続性を『反抗的人間』の序説のなかで述べている。<sup>3)</sup>

ロベール・ド・リュペも早い時期に「意識」に着眼し、不条理思想から反抗の思想への連続性を看破していた。<sup>4)</sup>

『反抗的人間』の刊行よりすでに5年ほど前にカミュは「反抗に関する考察」というエッセイで、『反抗的人間』の骨格になるような、論文を公表していることを見ても「反抗」の思想の連続性は明瞭だろう。

ドイツ軍がフランスを占領している真最中の1943年の7月から始まって、カミュはドイツの架空のある青年に宛てて書いたという形式で、都合4通の手紙を書き公表している。この中で、「われわれはともに長い間、この世界には最高の理由はなく、われわれは絶望に陥っていると信じていた。いまでも私はそのことを、ある意味において信じている」<sup>5)</sup>と言い、出発点においてニヒリズム的世界観をドイツの青年と共有していることを隠さず述べている。しかし、「私は君たちとは反対に、大地に忠実であるため正義を選んだ。この世界には最高の意味がないことを私は信じつづける。しかし、この世界のうちにある何かの意味を持っていることを知っている。それは人間である。なぜなら人間こそ、意味をもつことを要求されている唯一の存在だからだ。この世界には、少なくとも人間という真理がある」<sup>6)</sup>という自覚を披露し、「反抗」の思想によって、カミュはドイツの青年と決定的に袂を分かち、

1945年に公にされた、「反抗に関する考察」の冒頭部、「反抗的人間とは何か。それはまずNonという人間である。しかし、拒否するとしても放棄はしない。それはまたOuiという人間でもある」<sup>7)</sup>とう文言は、そっくりそのまま『反抗的人間』の第一章「反抗的人間」の冒頭部を飾っている。

『反抗的人間』の構成とその論旨を、簡単におさらいしておこう。『反抗的人間』の構成は序説と全5章からなっている。

「自殺と不条理の概念をめぐるはじめた考察を、殺人と反抗領域のなかにつづけることが、本書の目的である」(序説)と問題のありかが不条理か

ら反抗へ移行したことが明確にされる。カミュの意図は、彼が論理的殺人というところのイデオロギーによる国家あるいは集団的殺人の是非、つまりニヒリズムの検討なのである。「反抗という行動は、許しがたいと思われる侵害に対する絶対的拒否と、同時に正当な権利に対する漠然とした確信とに、さらに正確にいえば、反抗者の持つ〈…する権利がある〉という感じに基づいている」(第一章「反抗的人間」)<sup>8)</sup>とカミュはいう。

人間の連帯性は「反逆に基づいており、この連帯性のみが反逆を正当化するものだ、ということである。この連帯性を否認するような反逆は、どんなものであれ、真実の反逆ではなく、殺人への黙認」<sup>9)</sup>に他ならない。存在するためには、「人間は反抗しなければならないが、その反抗は反抗がそれ自体のうちに見出す限界を、人間は結合することによって存在し始める限界を尊重」(第一章「反抗的人間」)<sup>10)</sup>しなければならない。この意味において「反抗」と「歴史的革命」とは峻別されるのである。「反抗」は手段と目的、現実と理念との絶えざる緊張の中にあるのであるから。

不条理の体験では、「苦悩は個人的なものであり、反抗的行動が始まると、それは集団的であるという意識を持ち、それが万人の冒険」となる(第一章「反抗的人間」)<sup>11)</sup>。この考えを基に、デカルトをもじった有名な「われ反抗す、ゆえにわれら在り」の命題が導かれてくることになる。

形而上的反抗とは、「人間がその条件に対して、また全創造に対して立ち上がる行動である。それは人間と創造の目的を疑問視するがゆえに、形而上的である。奴隷は、彼の身分のなかで与えられる条件に反対し、形而上的反抗者は人間として与えられる条件に抗議する。反逆的奴隷は、主人の扱い方に承服できないものが自らのうちにあることを認める。形而上的反抗者は、創造によって欺かれると宣言する。どちらにとっても、純粹で、単純な否定だけが問題なのではない。事実、どちらにも価値判断があり、反抗者はそれに従って、自らの条件に対する承認を拒否する」(第二章「形而上的反抗」)<sup>12)</sup>のである。

不条理の認識は、黙して語らない世界に対して現状を認識することに留

まっていた。しかし、形而上的反抗はこの黙して語らない世界に対して積極的な働きかけを意味する。形而上的反抗者は「世界の統一を要求するために、分裂した世界に反抗する」（第二章「形而上的反抗」）<sup>13)</sup>し、「人間の条件の不完全な点に対しては、死によって抗議し、不統一な点に対しては悪によって抗議する」（第二章「形而上的反抗」）<sup>14)</sup>。そして「生と死の苦悩にたいしては幸福な統一を要求する」（第二章「形而上的反抗」）<sup>15)</sup>のである。

奴隷を例にした反抗には、あらかじめある価値が措定される。これはサルトルの実存主義理論と相入れない重要な点であることに注目してこう。

革命は形而上的反抗の論理的帰結に過ぎないが、それは明らかに必然的な論理によって、神を拒否し、歴史を選択する。こうした観点にたつてカミュは過去の革命を検証し、そこに過去の革命に見られるニヒリズムを読みとろうとする。カミュはいう。

革命は、特に唯物論的革命というものは、過激な形而上的反抗的十字軍にすぎない。だが全体性は統一であろうか。これが本書の答えるべき問題である。本書の分析の目的は、すでに何回となく試みられた革命的現象の叙述を行うことでも、大革命の歴史的、経済的原因を改めて調査することでもない。いくつかの革命的事実のなかに、形而上的反抗の論理的帰結と、その解説、不変の命題などを発見することである（第三章「歴史的反抗」）。<sup>16)</sup>

カミュの『反抗的人間』における論述全体が、いわゆる「カミュ＝サルトル論争」の火種になったことは、周知のところだが、第三章「歴史的反抗」の部分は、その核心部分となるところであることは記憶されるべきところだろう。

創造とは統一の要求である。…こうして芸術が、反抗の内容について、最後の見通しを与えてくれるにちがいない。…反抗とはこの点からいうと世界の建設である。このことは同時に芸術の定義ともなる。事実、反抗の要求は、ある点、美的要求である。前に述べたようにあらゆる反抗的思想は、あるレトリックによって、あるいは閉ざされた世界で、表現される。…これはまたあらゆる芸術の運動でもある(第四章「反抗と芸術」)<sup>17)</sup>。

というのが、カミュの反抗思想による芸術論である。

「人間の自由はそれぞれ、その最も深い根本において、相対的である」(第五章「正午の思想」)<sup>18)</sup>。神がいなくなっても「すべてが許される」わけではない。殺人を犯すようなことが是認されるような、絶対的な自由はないのである。

人間的条件の統一を要求する反抗は、生の力であって、死の力ではない。その深い論理は、破壊の論理ではなく、創造の論理である。…反抗者の論理は、人間の条件の不正を増さないように、正義に奉仕することを望むことにある。一般の嘘を増さないために明白な言葉を用いようと努力し、人類の苦悩に直面して、幸福のために賭けることである(第五章「正午の思想」)<sup>19)</sup>。

そしてカミュは「目的が手段を正当化するだろうか?」<sup>20)</sup>と問いかけ、「革命の過誤は、人間の本性から分離することができないと思われる限界、反抗が正しく示している限界を全く知らないか、あるいは故意に誤解しているかによって起こったのである」<sup>21)</sup>と、革命をニヒリズムの元凶として断罪するのである。我々は「正午の思想」において、カミュが次のように述べていることを確認しておこう。

革命は抽象から出発して、現実を型にはめる。反抗は逆に、現実を基盤として、真理への不断の闘争に進む。前者は上から下へと、後者は下から

上へと実現されようとする。反抗はロマン主義であるどころか、逆に真のリアリズムに属している。反抗が革命を望むとしたら、人生のためであって、人生に反してではない。<sup>22)</sup>

そしてカミュはいわゆる「中庸」の思想を唱え、さらに続けて言う。

けれども暗黒の果てには、光があって、われわれはかならずそれを認め、それが光り輝くように闘うべきである。ニヒリズムの彼方に、廃墟のなかで、われわれは一つのルネサンスを準備している。だがそれを知るものは少ない(「ニヒリズムの彼方へ」)。<sup>23)</sup>

とこの論文を締めくくっている。

「序説」から始まって、第一章「反抗的人間」、第二章「形而上的反抗」、第三章「歴史的反抗」と論を進めてゆく過程で、ナチスによるファシストたちの殺人はもちろん、マルキシズムによるイデオロギー的殺人もすべてニヒリズムと断罪した壮大な論述の結論が、第五章「正午の思想」で、「節度」と「中庸」が説かれ、政治的手法としては「革命的組合主義」であるというのは、常識的で平凡な感がしないでもなかった。

しかし、51年に『反抗的人間』が刊行された時には非常な人気をばくし、P.ソディ自身がカミュから聞いた話として、『反抗的人間』は「発表後一年のうちに7万部が売れた」<sup>24)</sup> そうだ。

そしてP.ソディのいうように「それが巻き起こした論争は、カミュがフランスにおけるもっとも重要な作家の一人であること」<sup>25)</sup>を立証した。しかし、P.ソディ自身は『反抗的人間』の評価に関しては留保をつけて、次のように述べている。

『反抗的人間』はフランスをはじめとして、イギリス、アメリカの批評家たちから称賛を受けたが、それにもかかわらず、彼の将来における名声



があくまでもこの特殊な作品に依存することができるかどうかは疑問であろう。たしかに『反抗的人間』は、彼の作品中もっとも論争のまよになった作品であると同時にもっとも称賛を受けた作品でもある。フランスにおいては、右翼から左翼にいたる思想家たちが熱狂的にこれを歓迎した。<sup>26)</sup>

P.ソディは、続いてフランスにおいては、称賛を送った方として、カトリックの保守的な思想家アンドレ・ルソーやクロード・ブルデルの名を挙げ、イギリスにおいては、サー・ハーバート・リード、フィリップ・トインビーなどの大物の名を挙げている。

この書が 51 年に刊行されて以来、右翼から左翼にいたる思想家たちが熱狂的にこれを歓迎した一方、左右両極から批判がなされたことも、周知のところである。幾つかあるなかで、いわゆる「カミュ=サルトル論争」にまで発展したフランシス・ジャンソンの批判が最も有名であり、論旨を明快に浮き彫りにする意味でも、これについて触れることは有効であろう。「カミュ=サルトル論争」についてはすでに言い古された感がないでもないが、ジャンソンがサルトル主宰の『現代誌』*Les Temps Modernes* に 52 年に寄稿した論文の要旨は、要するに、「革命を哲学者の観点から考察するだけで、通俗な(歴史的あるいは経済的)原因を除外している。事実さらに彼は、極論して、革命的事実のうちに、形而上的反抗の、〈論理的結果〉を見出しているとし、革命の発生に、歴史的・経済的事情の役割を全く認めない。要するに〈革命〉という概念を〈人間の神格化〉という概念に帰せしめることが、彼の仕事の眼目である」<sup>27)</sup> という一点につきているであろう。

カミュは早速反論するが、ジャンソン本人にではなく、その反論文はやや感情的なスタイルで『現代誌』の編集長であったサルトル宛に出されており、ジャンソンの書いた論文であるにもかかわらず「君の論文」と言ったような混合方式アマルガムをとり、冷静さを欠いていたことは否めない。

サルトルがカミュの反論に対して、冷静に長子的態度で解答し、自論を展

開し世間からサルトルの優位性が認められたことは、常識となっている。カミュ自身もあえて反論せず沈黙したことは自分の非を認めるような結果になったことも、一般的な受け止め方だった。カミュ、サルトル、ジャンソンたち、あるいは一般的に「歴史」あるいは「歴史主義」という時、それはいわゆる歴史的必然性を意味すると考えられるが、要するにジャンソンの批判とカミュの反論は重要な点で噛み合わなかったというか、ズレていた。ジャンソンの批判のポイントが革命の発生に、「歴史的・経済的事情の役割を全く認めない」という点であるとすれば、そこはカミュが『反抗的人間』で叙述した意図とは違う観点からの批判であったことになる。カミュはいわゆる「歴史的・経済的事情」である下部構造を無視したのではなく、前述したように『反抗的人間』の中で述べた「この分析の目的は、すでに何回も試みられた革命的現象の叙述を行うことでも、いくつかの大革命の歴史的、経済的原因を改めて調査することでもない。いくつかの革命的事実のうちに、形而上的反抗の論理的結果と、その解明、その不変の命題などを発見することである」<sup>28)</sup>と自説を再確認して反論をしている。カミュの革命批判は革命の下部構造批判でなく、いわば革命の「精神構造批判」とでもいえそうな批判だったことを確認しておく、必要があろう。

さらにカミュは歴史を否定しているのではなく歴史を絶対視しようとする態度を批判しているのだと次のように述べている。

断言すべき真実は、私の本は歴史を否定しているのではなく(そんなことは無意味な否定だ)て、ただ歴史を絶対視しようとする態度を批判するということである。<sup>29)</sup>

当時このような作品が称賛さたり、論争の火種となるような社会的状況はどのようなものであったのだろうか。

1944年8月25日にパリが解放されたが、フランス社会は戦後の混乱期を迎えるような状況だった。カミュ身边に限っても、多難な時期だったことがよくわかる。『コンバ』紙社説「解放国民運動」(9.19日)において、反

抗と革命を区別し、〈相対的革命〉への期待を膨らませたものの、事態はカミュの希望したようには進展しなかった。それどころか、対独協力派粛清の問題で、フランソワ・モーリャックとの間に論争がおこり、1946年12月には、ついにラ＝トゥール＝モオブール街のドミニコ会修道院で、講演し、モーリャックとの論争では自分に非があることを認めたことは周知のところである。

その間、ブラジャックの特赦請願が却下され、ブラジャックは銃殺に処せられている。45年5月8日にドイツ降伏。6月に『ドイツ人の友への手紙』を刊行。8月、広島(6日)、長崎(9日)に原爆が投下されると、カミュはいち早く原爆の恐怖を告発する(『コンバ』誌)。以後カミュは、政治的問題に関して、「反抗的ジャーナリスト」というような姿勢を如実に示す。—例えば、アメリカ講演旅行中(46年)に、コロンビア大学で「われわれはテロに反対するのだ」という趣旨の講演を行ったり(ブレ編『カミュ』参照)、47年3月にマダガスカルで反仏暴動が起こり、約8万人の先住民がフランス軍の弾圧によって殺害されるという事件に対しても、『コンバ』誌上で激しく抗議した(『アクチュエル I』参照)。『反抗的人間』の出発点である「反抗についての省察」を発表。46年10月、サルトル、マルロー、ケストラ、スペルベルらと政治討論会、だがこれは彼らの思想的対立激化をさせる結果となった。雑誌『文明』誌主催の討論会でスターリンによる側近のブハーリン(コミンテルン書記長、38年処刑)、ルイコフ(郵政人民委員、ソ連邦首相、38年処刑)、トゥハチェフスキー(元帥、赤軍参謀総長代理、38年処刑)などの粛清だったモスクワ裁判を批判し、これを擁護したメルロー＝ポンティと激論したことが知られている。11月、『コンバ』に『犠牲者も否、死刑執行人も否』*Ni Victime ni Bourreaux* を発表。これはあからさまな反共的立場の表明だったので、解放直後の、カミュの容共的姿勢を知るものにとっては衝撃的な態度表明だった。47年6月、『ペスト』刊行(ガリマール社)。12月、ダヴィッド・ルーセ、メルロー＝ポンティ、サルトルらと非政党的左翼の平和アピールに加わる。これはのち「革命民主連合」(RDR)に発展するが、カミュはこれには加らなかった。48年、

『戒厳令』 *L'Etat de siège* 初演。この戯曲は、全体主義的圧制に対する一市民の反抗のドラマである。49年、8月ソ連の強制収容所の存在が、はじめて国連で問題になる。10月、サルトル、「革命民主連合」(RDR)を正式に脱退。RDRは事実上崩壊。12月、『正義の人々』 *Les Justes* 初演。ソ連の強制収容所の存在が明るみに出た後も、左翼系の知識人たちは、まだ社会主義に対する期待も大きく、スターリンも健在で、いわゆる「冷戦構造」は確固としていて、国際情勢は緊張していた時代と言えよう。こうした政治的・思想的状況のなかでカミュは反抗の思想を徐々に醸成させていったことが推測される。このような状況の中で、『反抗的人間』を刊行することは、勇気のいることだったろうと思われるが、そこにカミュの信念と誠実さのようなものが感じられる。

『カルネⅡ』は1942年から1951年のメモを収録したものだが、1947年のメモに「第二の系列。反抗。『ペスト』(それにその補遺)——『反抗的人間』——『キャリアーフ』」<sup>30)</sup>という記述が見られる。この時期は『ペスト』、『正義の人々』、『反抗的人間』に関わる思索に費やされていたことが、窺える。

F.H.ウィルホイト Jr が『ニヒリズムを越えて』を世に問うたのは1968年のことだ。更に、この時より40年近くたった現在、「ニヒリズムを越える」一つの手がかりとして、『反抗的人間』を再評価する価値はあるのではなからうか。「カミュの反抗は生のために死に対してつねに向けられていた、ということが連続した糸として通っている」<sup>31)</sup>とF.H.ウィルホイト Jr は述べている。自殺であろうと殺人であろうと、死は絶対悪であり、死を招来するものはニヒリズムに通ずるというのが、カミュが到達した地点である。「形而上的反抗」における、絶対を渴望する反抗者は、最初の反抗から一切の限界を放逐してしまう、というようなロートレアモンやランボー解釈には異論もあるだろう。しかし一見単純な思想のようにも見えるが、「絶対」を否定するこうした地点に到達したところから見れば、ナチスによる国家殺人も、スターリンによるイデオロギー殺人もすべてニヒリズムなのだ。1991年にソ連邦が崩壊し、それに続いて東欧諸国の社会主義国が

瓦解したとき、人々は平和の到来を期待した。しかし、現実には民族紛争がおこり、これがやや下火になったかに見えたときに、アメリカによるイラク攻撃が始まり、それに対抗するかのようにテロ行為が頻発し、ニヒリズムの暗雲が世界を覆っているというのが現状だろう。「圧迫、侵害、人間に加えられる悲惨さは、量的にも質的にも、生命を殺ぐ。だから反抗的人間は、彼一箇の存在を超えて遥かに重要な意味を持つものとして、反抗があらわにする彼の存在の本質的に人間的部分を擁護するため、以上のものに断固として抵抗する」<sup>32)</sup> ことに学ぶ必要がある。

カミュが次のように述べていることを見ておこう。

あらゆる反抗者は、圧制者の前に立ちはだかるというただ一つの行動で生命を弁護し、隷属、虚言、テロリズムと闘い始める。そして瞬間的に次のことを認める。すなわちこのことは、これら三つの禍いが、人間たちを沈黙させ、お互いに相手を解らなくさせ、ニヒリズムから人間を救いうる唯一の価値のなかに、宿命と格闘する者同士の永続的相互理解を、人間たちが互いに見出すことを妨げているのだということである。<sup>33)</sup>

先で見たように、『反抗的人間』が刊行された当時、称賛されもしたが、政治的パースペクティヴとしては、ユートピア的と黙殺されるような厳しい現実があったことも確かである。しかし、カミュの思想を再審してみると、彼が、人間の条件について熟慮するに及んで、地中海的思想の根源と彼がみなしていた古代ギリシャの思想が、彼の胸のうちに大きく膨らんでいたことが読み取れる。短編集『夏』*L'Été*(1954)において次のように述べている。

ギリシャ思想はつねに限界の観念のうちに身を置いた。それは何ものも聖なるものも、理性も、極限まで押しすすめることはしなかった。なぜならギリシア思想は、なにものも、聖なるものも理性も否定しなかったからである。影と光の釣合いを保って、すべてのものを考慮した。反対に、全

体の征服をめざして猛進するわれわれのヨーロッパは、<sup>デムジュール</sup>過激性の娘である。自己が称揚しないいっさいのものを否定するヨーロッパは、美をも否定する。そして、さまざまな仕方があるにせよ、ただ一つのもの、すなわち未来の理性の帝国しか称揚しない。狂気のうちにあってヨーロッパは、永遠の限界を遠ざけようとする。そのとたん、ほの暗いエリニユス（ギリシャ神話の復讐の神——筆者注）が襲いかかってヨーロッパを引き裂く。ネメシス（ギリシャ神話で人間の倨傲に対する神々の怒りと罰を擬人化した女神——筆者注）が見張っている、——彼女は中庸の女神であって、復讐の女神ではない。限界を越える者は、すべて彼女により情け容赦なく罰せられるのだ。<sup>34)</sup>

我々は、「カミュの古典ギリシャの価値への賛美は、ギリシャ人が擁護した<中庸>と彼自身が思慕した<節度>とそれらのあいだに認められると思われた合致に主として集中していた」<sup>35)</sup> と言う F.H.ウィルホイット Jr に共感を覚える。

さらに、彼は次のようにカミュの思想を評価して述べる。

「彼にとって人間的な存在をトータルな、ニヒリズム的不条理性から救済する唯一の希望は、解答不可能に見える宇宙論的問題から転じて、はっきりとした人間的関心と体験に向かうことであった。後者の領域を忠実に踏査することで限界の発見——非人間的結果を伴わずにそれを超越することは不可能である——には充分だ、と彼は結論した。

われわれは政治的イデオロギーに対するカミュの態度を検討してみると、彼の倫理的パースペクティヴがヒューマニズムと共通したものを多く持っていることが、すでに明らかではあるが、なお一層明瞭となるだろう。」

<sup>36)</sup>

カミュをいわゆる彼の言う「反抗的人間」として位置づけてみると、「歴史への参加か、歴史の拒否か」ということで、「カミュ＝サルトル論争」と言われるような思想的文学史的な大きな問題に発展した問題が、両者の微妙な相違から亀裂が生じていることに気付かれはしないか。

カミュがレジスタンス運動の中で、果たした、結果としての歴史的役割の評価ということは別にして、その動機となったモラルの問題に関しては、きわめて明瞭であるように思われるのである。

サルトルを待つまでもなく、戦争は創造しないで、破壊する。何を破壊するのか。人間、すなわち、カミュのいう善を破壊するのである。善とは何か。言うまでもなく、これは、生のことであり、しかも、「反抗的人間」にとっては、この生は個人的なものではなく、万人のそれである。だからカミュは「反抗」を選んだのだ。このことが、サルトルには、「マルクスが言っているように、＜歴史＞をつくることなどは考えず、歴史がつくられるのを妨げ」<sup>37)</sup>るように思えたのである。

両者の相違ははじめから明らかであり、それは、彼ら二人が、その基盤としてもっていた歴史観の相違からくるものである。サルトルも殺人を許容する暴力革命を是認するものでは勿論ないが、「歴史」をめぐるの見解では、異なる地点に両者はいたのだ。

しかし、このことは、レジスタンス運動にカミュが参加したことの歴史的評価を減少させるものではないし、カミュのヒューマニズムを否定するものではない。

ピエール＝アンリ・シモンの言うように、カミュは、サルトルが「卑劣漢」と呼ぶようなヒューマニストでないことはもちろんである。つまりカミュは「自分自身の成功と社会的信用の上にあぐらをかいて、己れのために堅固な哲学、利己的な幻想に充ちた掩蔽物を築き上げ、その援護の下で、世界の不条理性や人間たちの悲惨さに全く気付かないでいるような」<sup>38)</sup>人間ではない。

図式的な言い方をすれば、『異邦人』および『シジフォスの神話』においては、生と「反抗」が対応していたのに対して、『ペスト』および『反抗的人間』においては、死と「反抗」が対応していると言えるだろう。そしてこの対応の仕方の相違は、「反抗」が、個人的なものから集団的なものへと移行発展していることを表してもいる。前述したように、「不条理の体験では、苦悩は個人的なものである。反抗的行動が始まると、それは集団的

であるという意識をもち、それが万人の冒険となる」と『反抗的人間』の中でカミュが言っていることを再確認しておこう。

こうして、この評論では、個人的テロリズムから、彼が論理的殺人と呼ぶ殺人(国家ないしは社会が犯す殺人)に至るまであらゆる種類の殺人が否定され、「ニヒリズムの特徴である生への無関心」<sup>39)</sup>を告発することが、主要目的となっている。次いで『反抗的人間』においてカミュが次のように述べていることに注目しよう。

生成というギリシア的概念は、歴史的発展という我々の考えとは、何の共通点もない。この二つのものの違いは、円と直線の違いに等しい。…この二つのものの断層は、自然と歴史的思想との敵対関係を強調すれば、よりよく理解される。歴史的思想から見ると、自然は観照の対象ではなく、変貌の対象である。マルキストにとってと同様、キリスト教徒にとっても、自然を制御することが必要である。ところで、ギリシャ人は自然に従った方がよいという意見である<sup>40)</sup>。

「歴史」を絶対視するゆえに、そこにニヒリズムを生み出すとして、歴史的思想ないしは、革命的思想が、この評論では批判されていることは周知のところである。そしてそれらの思想に対して、カミュは自然の思想を対置させているのだ。今、この「ギリシャ人は」というところを、カミュにおきかえてみるならば、このことは、明らかなこととして見えてくるであろう。

『反抗的人間』を書いた作者の思想の源に、「二、三の単純で偉大なイメージ」、つまり『結婚』や『シジフォスの神話』のあの生の世界、太陽の下では「歴史が一切でないこと」を教えた世界がカミュの根底にあることが納得されるであろう。

先で『シジフォスの神話』から『反抗的人間』へのカミュの思想の歩みにおいて、反抗のモラルの移行発展があると述べた。現代に認められるニヒリズムの源泉を歴史的思想に転嫁し、それに対して自然の思想を対置さ



せた『反抗的人間』の向かったこの単純化の方向を、Pソディは巧みに表現して次のように述べている。

カミュは、『ペスト』において、人間をもっぱら災厄による無実な犠牲者として、表現することに大変苦勞している。それはカミュのもっとも高貴な特徴の一つ——人間が本質的に悪であることを信じない態度であり、同時に『反抗的人間』の欠点の一つになった過度の単純化に向かわせたものでもある。

人間は善であるから、人間の犯す悪は彼らが誤って導かれるという事実から由来する。従って、彼らを誤って導くような影響をもつ哲学者こそ発見されなければならない。そこで都合よくヘーゲルが引合いに出される。つまり、彼こそ初期のコミュニストたちに影響を及ぼした哲学者であり、そしてまた、彼の思想こそはほとんどすべての政治的主張を正当化するために利用されるのである。それゆえに、ヘーゲルは、コミュニズムが犯した犯罪に責任があるとカミュは説くのである。<sup>41)</sup>

殺人は、いかなる理由があろうとそれは絶対悪だし、目的のために手段を選ばないということで、革命のために殺人を犯すことをニヒリズムだと弾劾したカミュの論調に共感を覚えながらも、果たして「節度」とか「中庸」の思想で歴史の流れが変えられるのだろうか、という素朴な疑問がないわけではなかった。しかし、第二次世界大戦後の7年目にあたる1952年の「ヨーロッパ石炭鉄鋼共同体 (ECSC)」の設立から始まって、ついに現在の「ヨーロッパ連合」EU にまでこぎつけたヨーロッパの現実を見ると、我々はカミュが主張した方向へ歴史が動いていることを実感するのである。『犠牲者も否、死刑執行人も否』において、次のように述べているのは、非常に示唆的であろう。

国家的あるいは国際的デモクラシーとは何か。それは法律が諸政府の上であり、この法は立法機関によって代表された万人の意志の表現であるよ

うな社会形態である。今日、人が設立しようと試みているのはこういうものであろうか。成程国際法が作られてはいる。しかしこの法律は諸政府によって、すなわち行政権によって作られたり壊されたりする。だからわれわれは国際的独裁の支配下にあるのだ。そこから出る唯一の道は国際法を諸政府の上に置くこと、従ってそういう法律を作ること、従って一つの議会を規定すること、従ってあらゆる国民が参加する世界選挙によってこの議会を構成することである。<sup>42)</sup>

刊行以来賛否両論が多々ある中で、「カミュ=サルトル論争」によって沈黙を余儀なくされた『反抗的人間』の成否とは、おそらく、P.ソディが言うように、単純で乱暴な、その「歴史」批判の方法論を言うのであろうが、ニヒリズムを拒否するカミュの思想を今再検討してみる必要はあるのではないだろうか。

(本学教授)

#### 注

- 1) Albert Camus: *Le Mythe de Sisyphe*. Gallimard. 1943. pp.88-89
- 2) Fred.H.Willhoite Jr.: *Beyond Nihilism Albert Camus's Contribution to Political Thought* (Baton Rouge, Louisiana State University Press, 1968, p.51)
- 3) Albert Camus: *L'Homme Révolté*. Gallimard. 1962. p.15
- 4) Robert de Luppé: *CAMUS. Classiques du XX<sup>e</sup> Siècle*. Ed. Universitaires. 1964. p.33
- 5) Albert Camus: *Lettres à un ami allemand*. Gallimard. 1948. p.70.
- 6) Ibid. p.74.
- 7) Albert Camus: *Essais*. Pléiade. Gallimard. p.1682. 1965.
- 8) Albert Camus: *L'Homme Révolté*. op.cit. p.25
- 9) Fred.H.Willhoite Jr. op.cit. p.74
- 10) Albert Camus: *L'Homme Révolté*. op.cit. p.35
- 11) Ibid. p.36
- 12) Ibid. p.39.
- 13) Ibid. p.40

- 14) Ibid. p.40
- 15) Ibid. p.40
- 16) Ibid. p.138
- 17) Ibid. pp313-316.
- 18) Ibid. p.351.
- 19) Ibid. p.352
- 20) Ibid. p.361
- 21) Ibid. p.363
- 22) Ibid. p.368
- 23) Ibid. p.376.
- 24) P. Thody: *Albert Camus 1913-60*, Hamish Hamilton, p.131
- 25) Ibid.p.131
- 26) Ibid.p.131
- 27) *Les Temps Modernes*(1952. 5) p.2077<リプリント版
- 28) *Les Temps Modernes*(1952.8) pp.321-322<リプリント版
- 29) Ibid. pp.323-324
- 30) Albert Camus: *Carnets II*. Gallmard.1964. p.201.
- 31) F. H. Willhite Jr.op.cit.p.78
- 32) Ibid.p.79
- 33) Albert Camus: *L'Homme Révolté*: op.cit. pp.350-351
- 34) Albert Camus: *L'Eté*. Gallmard .1954. pp.106-107.
- 35) F. H. Willhite Jr.op.cit.p.100
- 36) Ibid.p.101
- 37) J.-P. Sartre: *Situations. IV*. Gallimard,p.116.
- 38) P.-H. Simon, *Présence de Camus*, A-G.Nizet, pp.167-168.
- 39) Albert Camus: *L'Homme Révolté*: op.cit. p.17.
- 40) Ibid.p. 235.
- 41) P. Thody: *Albert Camus 1913-60*, op.cit. p.183
- 42) Albert Camus: *Actuelles Chroniques 1944-1948*. Gallimard,1950 .p.164